



Title	コメニウスのポーランドにおける活動とそのポーランド観
Author(s)	シリジニスキ, イェージィ//著; 伊東, 孝之//訳
Citation	スラヴ研究, 19, 177-189
Issue Date	1974
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/5043
Type	bulletin (article)
File Information	KJ00000112988.pdf



[Instructions for use](#)

コメニウスのポーランドにおける活動と そのポーランド観^[1]

イエージィ・シリジニスキ
訳 伊 東 孝 之

訳者による序文 シリジニスキ氏は、1973年4月に北海道大学スラブ研究施設の招きで日本学術振興会の流動研究員として来日し、約2ヶ月間札幌その他で講演・視察旅行をおこなった。ここに紹介する論稿は、このときの講演の一つと内容的に関連しており、^[2]原稿は氏の帰国後ワルシャワから訳者のもとに送られてきた。シリジニスキ氏は、1968年以来ポーランド科学アカデミー・スラブ文学研究所西・南スラブ文学部門部長の要職にあり、いままでに300篇を越える論文、著書を著している。氏の研究は、主として文学史の分野に属するが、とりわけ西スラブ諸民族、すなわちポーランド人、チェコ人、スロヴァキア人、上・下ラウジツ人のあいだの文学的交流に関するものが多い。代表的なものを挙げれば、

『ポーランドにおけるボヘミア同胞教団の活動について』^[3]

『アロイス・イラセクのポーランド人との書簡交換について』^[4]

『上および下ラウジツ地方の伝承』^[5]

などがある。

近代教育学の創始者コメニウスの思想は、従来そのラテン語およびドイツ語の著作を通して知られてきた。コメニウスがボヘミア出身であり、チェコ語においても多方面な著作活動をおこなっていることはよく知られていたが、言語的障壁のためこの方面の研究は著しく遅れていた。19世紀中葉のチェコ人の民族的覚醒とともにチェコ人のあいだで偉大な同国人への関心が急速に高まり、以来主としてチェコの学者の研究によってコメニウスの学問のそれまで知られなかった側面がつぎつぎと明らかにされるようになった。今日ではチェコ語の文献を無視しては、コメニウスの学問を語ることはほとんどできなくなっているといつてよいであろう。

ところでコメニウスのチェコ語のみならずラテン語、ドイツ語の著作の大きな部分がポーランドで成立していることは、従来見過されがちであった点である。シリジニスキ氏の学問的貢献は、コメニウスのポーランドにおける活動を新しい史料の発掘と厳密な文献的考証に基いて明らかにした点である。この方面で明らかとなった事実の大きさから見て、今後のコメニウス研究はチェコ語文献のみならずポーランド語文献をも無視し得なくなるだろうと思われる。

従来コメニウスの思想の世界市民主義的要素が強調され、そのナショナルな性格について言及されることが少なかった。19世紀以来のチェコ史学がこれまで疎かにされてきたこの側面の解明に努力してきたことは言うまでもない。このようなチェコの歴史家の努力は近来次第に認められるに至り、今日コメニウ

以下（ ）は原注を示し、[] は訳註を示す。

[1] Jerzy Śliziński, *Jan Amos Komenský w Polsce i o Polsce*.

[2] 札幌でおこなわれた講演は以下のとおりである。

「ポーランド＝チェコ文学関係史概観」, 5月7日, 北海道大学文学部ロシア文学科学生を対象として。

「比較文学方法論」, 5月8日, 北海道スラブ研究会の月例会合において。

「ポーランドにおけるコメニウスの学問活動」, 5月14日, 北海道大学文系4学部教官・院生を対象として。

「西スラブ諸民族のフォーク・ロア」, 5月18日, 北海道大学法学部学生を対象として。

[3] *Z działalności literackiej Braci czeskich w Polsce*, Warszawa 1959.

[4] *Z Korespondencji Alojzego Jiraska z Polakami*, Wrocław 1957.

[5] *Podania górno- i dolnołużyckie*, Berlin-Ost 1963.

スが素朴なボヘミア的郷土愛感情をもっていたことを否む人はほとんどあるまいと思われる。シリジニスキ氏もこのようなチェコ史学の伝統を踏襲しているといつてよい。しかし氏はもうひとつの課題をみずからに課している。氏はすなわちコメニウスがたんにチェコの愛国者であったのみならず、またその「第二の祖国」たるポーランドのよき友でもあったことを証明しようとしている。このような視角は、ポーランド史学の伝統においていささか特異なものであるといつてよいだろう。

一般にポーランドにおいては、コメニウスの世界市民主義もボヘミア的郷土愛も忠誠心がポーランド外のものに向けられていたということにおいて同一であり、この思想家はポーランド国家の潜在的な反逆者であったという見解が強い。たとえば著名な歴史家タズビルは、戦前派の歴史家コトの「17世紀の中葉からポーランドは西ヨーロッパの政治的文献において絶えざる批判と非難の対象となり、……外国政府によって激励され買われた連中の嘲りの的となった」^[6]という見解を引いて、「新しい権力者カール・グスタフを卑屈なことばで迎えたコメニウスの騒々しい頌歌は、この古典的な例となり得る」^[7]と述べている。タズビルはまた別のところで「たとえ……コメニウスに率いられたボヘミア同胞教団のあいだで万人に公平な新王〔カール・グスタフ〕の統治が喧伝されたとしても、それはたんなる空文句に過ぎなかった。このような要求にはなんら具体的な内容が結びつけられなかったし、いかなる急進的な改革も望まれなかったのである」^[8]と述べている。

このような見解は、いささか今日的な民族国家的思考にひきずられている感がある。この点シリジニスキ氏の立場は、民族国家的偏見から免れているといえる。しかしいづれにせよコメニウスが親ポーランド的であったか反ポーランド的であったかという問題は、われわれ日本人にとってはあまりにも縁遠いことのように思われる。このような問題がいまだにアクチュアルな論争点となっているところに、今日のポーランドの学界の雰囲気を知ることができよう。

シリジニスキ氏は、ポーランドという国がコメニウスという世界的な学者の誕生にいかに関与したかを力説している。この点は非常によく理解されるのであるが、日本の読者が関心をもっているのはおそらくそういうことではなく、むしろコメニウスのポーランド滞在がその思想の個々の要素の成立と如何なる関連にあるのか、またコメニウスの思想が同時代の、あるいはそれ以降のポーランド社会に如何なるインパクトを与えたのかという問題であろう。おそらく紙数の関係もあってシリジニスキ氏がこの点にあまり触れていないことに読者は喰い足りないものを感じるかも知れない。

ともあれわが国において比較的知られることの少ないコメニウスに関するポーランド語の文献を紹介することは決して無意味ではないと思われる。この論稿の紹介が多少ともわが国におけるコメニウスの研究の前進に寄与するならば訳者の望外の喜びとするところである。

翻訳にあたっては細心の注意を払ったつもりであるが、専門外のことなので初歩的な誤謬を犯しているかも知れない。大方の批判を乞う次第である。日本の読者にとってあまり自明でない事柄については訳注を施した。原文においてラテン語、チェコ語で引用されているところ、および人名、地名その他固有名詞は訳注においていちいち原語を示した。ラテン語については哲学の花田圭介教授の助力を仰いだ。ここに深く感謝する次第である。

1458年にターボル派^[9]やその他さまざまの宗派の残部から、ボヘミア同胞教団^[10]が形成された。同胞教団は、フス教徒の伝統を引き継ぐものであった。当初は、教団のメンバー

[6] S. Kot, *Rzeczpospolita Polska w literaturze politycznej Zachodu*, Kraków 1919, 118.

[7] J. Tazbir, *Rzeczpospolita i świat. Studia z dziejów kultury XVII wieku*, Wrocław 1971, 178.

[8] J. Tazbir, *Stanisław Lubieniecki. Przywódca ariąńskiej emigracji*, Warszawa 1961, 86.

[9] Táborité. フス教徒のなかの急進的平民的分派。フス戦争(1419-34)においてジシュカ(J. Žižka)を指導者として軍隊を組織。運動の中心がボヘミア中部の要害の地ターボル(Tábor)にあったところからターボル派と称される。

[10] Jednota Bratří Českých.

は周囲の世界から完全に孤立していた。世俗的な遊び事や唱歌は禁止された。教団員は、いかなる世俗的な役職に就くことも許されなかった。なぜなら教団においては、すべての者の絶対的な平等が支配していたからである。所持品は共有財産であった。武器を携えること、人を殺すことは許されなかった。なぜなら人々は、血を至高の宝物とみなしたからである。ここに明らかに見ることができるように、教団の精神的な生みの親はチェコの偉大な哲学者ペトル・ヘルツキ^[11]であった。しかしこれにもうひとつの教義が加わった。すなわち、科学は悪魔の発案であり、それゆえに科学は忌避すべきであるという教義である。

しかしながらすでにその創始者ジェホシュ・クライチ^[12]の死の年に教団の内部に分裂が起った。いわゆる「多数派」^[13]と「少数派」^[14]が成立した。前者はすべてのユートピア的傾向を捨てつけ、科学に広く門戸を開いた。まもなくボヘミア同胞教団は、チェコ人の文化生活における一種の前衛となった。超保守的な「少数派」は数年後に自然死を遂げた。ボヘミア同胞教団のすぐれて進歩的なイデオロギーは、当時のボヘミアの支配者であったハプスブルク家の封建的な支配体制を狙い撃ちするものであった。ハプスブルク家は、権力を掌握したそもそものはじめから同胞教団をきびしく弾圧した。この王朝は、教団員は自分の信仰を捨てカトリック教を受け容れないかぎり国外追放処分にする——たとえば1620年の白山^[15]の戦いののちの如く——という政策をとった。

ポーランド人は、祖国をおわれたボヘミア同胞教団のメンバーに二度兄弟的な援助の手をさしのべ、亡命者を国内に迎え入れた。最初の亡命者の受け入れは、1548年であった。当時フェルディナント一世は、ハプスブルク家に勝利をもたらしたシュマルカルデン戦争^[16]ののち、王の直轄領に居住する教団員を国外に追放した。ポーランドには、当時およそ800のチェコ人亡命者がやってきた。白山の戦いでチェコ民族の敗北ののち、大量の同胞教団員——加うるに新聖盃派^[17]とその他の改革派教会のメンバー——がポーランドに到来した。同胞教団のメンバーだけでも、1628年におよそ1700人が到来した。

教団員は、主として大ポーランド^[18]のレシュチュイニスキ^[19]家、グルカ^[20]家、オストロルク^[21]家その他のポーランドの領主たちの所領に定住した。かれらを受け入れた領主た

[11] Petr Chelčický (1390頃-1407).

[12] Řehoř Krajčů (1474死) [原文では Krejčů となっている。しかし *Ottův Slovník naučný*, Praha 1888-1909, XXI, 427 によれば Krajčů が正しいようである]。

[13] Větší Stranka.

[14] Menší Stranka.

[15] Bílá Hora. ドイツ名 Weißer Berg. プラハ近郊の小高い丘。

[16] Schmalkaldischer Krieg (1546-47). ドイツのプロテスタント諸侯の同盟（シュマルカルデン同盟）軍と皇帝軍との戦争。シュマルカルデン（Schmalkalden）はドイツ中部の都市。

[17] Novo-Kališníci. 聖盃派（Kališníci あるいは両形色説派 Utrakvisté ともいう）はウス教徒のうちの穏健派。ターボル派に対立。二つの形色、つまりパンとぶどう酒の形色で聖体拝受をするところから名称が由来。信徒が聖体を拝受する聖盃が信徒のシンボルとなる。新聖盃派とは16世紀の中葉にカトリックに接近した旧聖盃派の流れをひく一派。

[18] Wielkopolska. ポズナニを中心とする地方。これに対してクラクフを中心とする地方を小ポーランド Małopolska という。

[19] Leszczyński.

[20] Górk.

[21] Ostroróg.

ち自身も、大部分同胞教団に加わった。まもなくレシュノ^[22]が同胞教団のポーランドにおける主たる中心地となり、「国教反対派^[23]の首府」と称された。この町は、オストロルク家の没落後も大ポーランドの領主たちの居所となった。1625年にレシュノの城門を敲く者があった。それはヨハン・アモス・コメニウスであった。コメニウスを派遣したのは、東ボヘミアのブコフスキー^[24]の所領に集まっていた同胞教団員であった。派遣の目的は、それまで祖国の森林や山岳に身を潜めていた教団員をレシュノその他のレシュチュイニスキ家の所領に迎え入れるように教団の誠実な友であり、庇護者でもあったラファウ・レシュチュイニスキ^[25]と交渉することであった。

1628年2月8日に、われわれはコメニウスをふたたびレシュノにおいてみる。このたびは、コメニウスは、ポーランドに定着することになる第二陣の亡命者の最初のグループとともにあった。コメニウスの一行のなかには、なかなしくコメニウスの教え子ポニャトフスカ^[26]がいた。かのじょのことについてはクラシェフスキ^[27]が『アテネウム』誌において書いている。⁽¹⁾クラシェフスキは、コメニウスの『闇のなかの光』^[28]⁽²⁾を利用している。そこには『クリスティナ・ポニャトフスカに示された天啓』^[29]が収録されている。

ポーランドは、近代教育学の創始者の第二の祖国となった。コメニウスは、イギリス、スウェーデン、エルブロンク^[30]、ハンガリーへの旅行によって惹起された長期の中断を除いて、レシュノに1656年4月まで、つまりこの都市が焼失した年までとどまった。ほかならぬポーランドの地において、偉大なチェコ人コメニウスの名を全世界に轟かせた著作が成立した。けだしコメニウスの著作活動の絶頂をなすのは1628-41年、すなわちコメニウスの第一次レシュノ長期滞在の時期だからである。

ポーランドの都市レシュノにおけるコメニウスの活動は、きわめて密度の高いものであり、かつ多方面にわたっていた。1628年から1641年までコメニウスはボヘミア同胞教団によってすでに1555年に創立されたレシュチュイニスキ庄のギムナジウムで教鞭をとり、1637年からこの学校の校長として活動した。コメニウスはボヘミアの地ですでに完成していた作品をレシュノで出版している。たとえば、1631年に『世界の迷宮』^[31]が、2年後に『安全の基礎』^[32]と『現世の拒否』^[33]が一緒に出版されている。コメニウスが迫害されてい

(1) *Athenaeum*, V (1845), 98 [原文には *Atheneum* とあるが *Athenaeum* が正しいようである。 *Wielka encyklopedia powszechna*, Warszawa 1962-70, VI, 162].

(2) この書は、現在までチェシュイン (Cieszyn) 博物館に寄託されているクラシェフスキの蔵書のなかにある。

[22] Leszno. ドイツ名は Lissa.

[23] innowierci. 異端者 heretycy, 異教徒 poganie と異なる。

[24] Karel Bukovský z Hustiřan.

[25] Rafał Leszczyński (1579-1636).

[26] Krystyna PoniatoŃska (1610-44).

[27] Józef Ignacy Kraszewski (1812-87).

[28] *Lux e tenebris*.

[29] *Revelationes Christinae Poniatoviae factae* [原文では ……factes となっているが、factae が正しいようである。 *Soupis děl J. A. Komenského*, Praha 1959, 378 を参照せよ].

[30] Elbląg. ドイツ名 Elbing. 本稿 109 ページを見よ。

[31] *Labyrint svĕta*.

[32] *Hlubina bezpeĕnosti*.

[33] *Výhost svĕtu* [原文では *Vejhost svĕtu* となっているが *Výhost svĕtu* が正しいようである, *Soupis děl*, 372 を参照せよ].

た教団員を勇気づけようとしてまだ祖国の森の奥深くに身を潜めていたときにチェコ語で書いたかの諸傑作が、ほかでもなくポーランドにおいてはじめて印刷されたのであった。

新しく成立したコメニウスの著作のなかでは、まず有名な『語学入門』^[34]がすでに1631年に守護の嫡子ボグスワフ^[35]への献辞つきでレシュノで出版されている。この書のチェコ語訳『開かれたる諸言語の門戸、あるいは種床』^[36]が陽の目を見たのは、ようやくその2年後であった。同じ年にヴェンギェルスキ^[37]がポーランド語訳を出している。ここではただひとつだけを指摘しておきたい。それは、実際生活からまったくかけ離れていたそれまでの教育方法ときっぱり縁を切るこの著作を書く刺戟のひとつとなったのが1615年に数人のスペインのイエズス会士によって書かれた『語学入門』^[38]という本であったということである。この書は1629年までに8ヶ国語に翻訳出版されている。チェコの教育学者はこの書に含まれている不明確な思想——コメニウスはこれを「裏からの入門」と呼んだ——を深め、徹頭徹尾独創的な仕方で標示した。かれはその際スコラ的な概念区分や定義体系と縁を切ると同時に新しい視覚的教育方法を編み出した。

この著作をコメニウスは、1633年に刊行された低学年用の『入門』^[39]という本で補った。同じ年に有名な『母親学校便覧』^[40]が出版された。これは主としてこの大教育学者自身の体験と観察に基くものである。この書を読むとそれが300年以上も昔に書かれたことを忘れてしまうほど、その内容は今日もなおアクチュアルであるが、ほかならぬこの本が実に200年ものあいだ完全な忘却に附されていたのである。この書がふたたび世の注目を浴びるようになったのは、ようやく19世紀の後半、歴史家ギンデリ^[41]が1856年にレシュノでこの著作のチェコ語の手稿を発見してからであった。

同じ1633年には、コメニウスの物理学の教科書『神の光によって改革された自然学の概観』^[42]が世に出た。これはアリストテレスの説と鋭く対立するものであった。コメニウスの書簡⁽³⁾から判明するところでは、同じ時期に『自然学の光によって改革さるべき天文

(3) モヒンゲル (Mochinger) 宛書簡を参照せよ。J. Patera, *Jana Amosa Komenského Korespondence*, Praha 1892, XIX.

[34] *Janua linguarum reserata*. 原義は「開かれたる諸言語の門」である。本文においては定訳を採った。

[35] Bogusław.

[36] *Dverě jazykův otevřene čili semenišť* [*Soupis děl*, 132-6 によれば、チェコ語版、ラテン語版、ドイツ語版、英語版、ポーランド語版のいずれも同じ年に、すなわち1633年に出版されている。古チェコ語の原題は、*Dwéře Gazyků odewřené To gest Krátký a snadný způsob Kteréhokoli Gazyka* となっており、1667年、1716年、1805年、1880年のいずれのチェコ語版においてもここに示されているものとは少しづつ異ったタイトルが採られている]。

[37] Andrzej Węgierski.

[38] *Janua linguarum*.

[39] *Vestibulum*.

[40] *Informatorium školy mateřské* [原文ではポーランド語訳 *Informatorium szkoły macierzyńskiej* が用いられている。なお、1633年の初版はドイツ語で *Der Mutter Schul* と題されている、*Soupis děl*, 212 を参照せよ]。

[41] Antonín Gindely (1829-92).

[42] *Physicae ad lumen divinum reformatae synopsis* [原文では *Physicae od lumen* …… となっているが、*Physicae ad lumen* …… が正しいようである。*Soupis děl*, 341 を参照せよ]。

学』^[43] というタイトルの天文学の教科書が成立している。コメニウスはこの著書のなかで学問のこの部門を古代の哲学者の古くなった教説から洗い浄めようと努力したのであるがその手稿は今日までまだ発見されていない。残念なことにわれわれはコメニウスの『語学入門』のドイツ語訳者宛の書簡のなかにつぎのような一節を見出す：「なぜなら、もろもろの離心円、小円および物的な円輪の無用な積み重ねによって、また同じくコペルニクスにおける奇怪な地球の運動によって、尊大になっているから。」^[44] (4) コメニウスにとっては、すべての知識の源泉はわれわれをとりまく世界と聖書であった。かれは、この二つの認識の源泉のあいだには、なんら矛盾がないものと考えた。にもかかわらず、もしこのような矛盾が存在する場合には、無条件に聖書が優先されるべきであった。ここにコペルニクスの主著『天体の回転について』に対するコメニウスの否定的な態度が由来している。コメニウスは早くもハイデルベルク留学中にこの書の手稿を買い求めているのであるが。

コメニウスはレシュノで教科書作成の仕事を熱心におこなった。上記のものほかに、新しい祖国に到着してからしばらくして、6つの学年のためにチェコ語で書かれた教科書の作成を開始した。『堇園』^[45]、『緑樹園』^[46]、『薔薇園』^[47]、『迷宮』^[48]、『香樹園』^[49]、『動物園』^[50] (5) がそれである。まさにこのような類の著作活動がコメニウスとラファウ・レシュチュイニスキとの接近に大いに貢献したのであった。子供のことをよく考える父親であったラファウ・レシュチュイニスキは、この時期に自分の二人の息子——ボグスワフとヴワディスワフ^[51]——を勉学のためにレシュチュイニスキ庄の学校に預けた。ラファウ・レシュチュイニスキこそは、教団員が思いがけなく異国の地に長期滞在することになったことを考えて、コメニウスに、もともとは自民族のためにだけ書いた著作を「サルマチアの祖国」^[52] (6) の用に供するようにと説き勧めたその人であった。ポーランドにおける同胞教団の庇護者は、自分の被後見人のすぐれた天分を見てとった。コメニウスは、宗教会議の同意を得て、テーマにおいてレシュノの学校における自分の活動と密接に結びついた執筆計画書を庇護者に提出した。コメニウスは『入門』と『語学入門』の手直しを企て、『ラテン語総覧』^[53] というタイトルのラテン語＝ポーランド語＝ドイツ語辞典の編纂を企

(4) J. Pantera, 前掲書, XIX を参照せよ。

(5) J. Kvačala, *Johann Amos Comenius*, Leipzig 1892, 補遺, 74.

(6) コメニウスのニクラシウス (Niclassius) 宛の書簡を参照せよ。J. Patera, 前掲書, XXI.

[43] *Astronomia ad lumen physicum reformanda* [原文では *Astronomia od lumen phísicum* ……となっているが訳註 [40] と同様 *Astronomia ad lumen physicum* ……が正しいようである]。

[44] *Sublata enim inutili Eccentricorum et Epicyclorum Orbiumque realium suppellectili, itemque monstroso apud Copernicum terrae motu.*

[45] *Violarium*

[46] *Viridarium*

[47] *Rosarium*

[48] *Labyrinthus* [原文では *Labirinthus* となっているが *Labyrinthus* が正しいと思われる]。

[49] *Balsamentum.*

[50] *Paradisus animae*

[51] *Władysław*

[52] ポーランドのこと。ポーランド貴族は、前4世紀から後5世紀にかけて黒海北岸に出没したイラン系の遊牧民族サルマチア人の子孫であるという伝説にもとづく。

[53] *Palatum latinitatis.*

てている。この計画のなかに「汎知」^[54]ということばが出てきている。けれども著者が最大の注意を向けたのは、『大教授学』^[55]であった。著者のポーランドの友人ラファウ・レシュチュイニスキが、この著作を「たんに望んだばかりではなく、また気前よくその著作に必要な財政的支援を申し出た」と、コメニウスは1633年に出版された『便覧』のドイツ語訳への序文のなかで書いている。外国のコメニウス研究者で、この偉大なチェコ人のすべての教育学上の著述の基礎となり出発点となった著作、『大教授学』を取り上げながら、この著作がほかでもなくポーランドで成立し、ポーランド人から示唆されたものであることに言及する人は少ない。チェコ語版の原本は、『ボヘミア王国の学校の改革についての短い提案』^[56]という題名の補遺と一緒に1841年にプルキニェ^[57]によって発見されたが、これはコメニウスが1632年にレシュノで完成したものであった。この基本的な著作のラテン語版もまた同地で成立したが、好意的な庇護者であり、友人であったラファウ・レシュチュイニスキが1639年春に世を去ったことによってコメニウスの出版計画は頓座した。『大教授学』は一層拡大された形で、ようやく1657年になって、アムステルダムで出版された教授学関係の著作集に収められて陽の目を見ることになった。

チェコ語俚諺集『古い祖先の知恵』^[58]は、『語学入門』の補遺として通常『大教授学』の諸版に添付されて出版されているが、これも同様に『大教授学』の著者のレシュノ滞在の最初の数年のあいだに完成したものである。

コメニウスの「汎知」構想は、すでに『語学入門』の執筆にかかっていた1630年頃に生れた。この書がヨーロッパのほとんどの国で収めた大成功ののち、著者は『語学入門』第二版の執筆を決心した。それは、当時人間が知るに価すると考えられたすべてのものをわがものとするのに資する筈であった。⁽⁷⁾ コメニウスは、百科全書的なタイプの教科書の執筆を断念した。なぜなら「汎知」理論に立脚した研究計画が著しく拡大したからである。コメニウスの「汎知」は、通常の百科全書的知識とは根本的に相違するものであった。けだしそれは量的な多さを有機的統一の体系で置き換える筈であったからである。⁽⁸⁾

自分の企図についてこの偉大なチェコ人は、ロンドンに滞在していた友人ハートリブ^[59]に書き送った。コメニウスはハートリブに一種の草案を送付したのであるが、ハートリブはこれを1637年にコメニウスに無断で『コメニウス教説入門』^[60]と銘打って発表してしまった。2年後、今度は著者の同意のもとに、レシュノで完成した『汎知新論』^[61]という題名の著述が刊行された。まだポーランドにいたころに構想が生れていた「汎知」関係の諸著作のなかで、ここでは『人事改善に関する大いなる勧告』^[62]を挙げよう。つい最近まで

(7) コメニウスのエヴェニウス (Z. Evenius), レシュチュイニスキ, ヴィンクラー (J. Winkler) 宛書簡を参照せよ。J. Patera, 前掲書, III, VII, XIII.

(8) J. Hendrich, "Komenský pansof," *J[an] A[mos] K[omenský]*, Praha 1947, 104.

[54] Pansofia.

[55] Didactica magna.

[56] Navršení krátké o obnovení škol v Království českém.

[57] Jan Evangelista Purkyně (1787–1869).

[58] Moudrost starých předků

[59] Samuel Hartlib.

[60] Conatuum Comenianorum praeludia.

[61] Pansofiae prodromus.

[62] De rerum humanarum emendatione consultatio catholica.

この著作のうちで知られていたのは、ほんの最初の二章だけであった。『大いなる勸告』の欠けている部分を発見したのは、ハレ大学のチジェフスキー教授であり、およそ30年ほど前のことであった。⁽⁹⁾

コメニウスの1640年9月12日付および1641年1月19日付のボグスワフ・レシュチュイニスキ宛の書簡⁽¹⁰⁾から明らかなように、すでに当時学校用教科書を図解するという構想が生れていた。これは、ハンガリーのサロス・パタク^[63]で完成した『世界図絵』^[64]においてはじめて実現されることになる構想であった。

またコメニウスの第一次レシュノ滞在のときに『ラテン語法研究』^[65]という短い論文が書かれている。これは著者がヴロツワフ^[66]の市参事会に献じたものであった。市参事会は市のギムナジウムの教科書として『語学入門』と『入門』を採用した。

コメニウスは、生徒演劇を学校教育の基本的な補助手段とみた。けだし生徒演劇は、所与の対象に対する生徒の関心を喚起するのに大いに貢献するからである。一般に演劇はこのチェコの偉大な教育家にとって「ひとつの鏡であり、そこに人が何であるべきか、何であるべきでないかを見ることが出来るもの」⁽¹¹⁾であった。ところでコメニウスは自分の生徒のために戯曲を書いている。そのうちまず1640年初頭に⁽¹²⁾『キュニック派のディオゲネス』^[67]、^[67]ついで翌年に『太祖アブラハム』^[68]が上演されている。これらの戯曲は大成功をおさめ、その教育的価値のゆえにボグスワフ・レシュチュイニスキの率直な称讃を勝ち得ている。またレシュノの生徒劇場は1650年に『語学入門』最初の30章を脚色したものを上演し、1651年には同じ作品の31-50章を脚色したものを続演している。

コメニウスの第一次レシュノ滞在の時代に由来する数多くの著作のなかで、もうひとつ『ボヘミア同胞教団の教会規約』^[69]を挙げるべきであろう。人々はコメニウスを1632年秋に教団作家に選んだとき、かれにこの著作の印刷の工面も任せた。『教会規約』は『ボヘミア教会迫害史略』^[70]が出る前に刊行された。後者はようやく1647年になって1632年の日付入りの序文とともに出版されている。当初『迫害史』を1633年の『教会規約』のラテン語テキストと一緒に出版する予定であったが、これは実現しなかった。

かつてはかの『迫害史』の著者としてハルトマン^[71]が擬せられたものだった。たしかにかれは資料の蒐集において助力している。しかしながら著者は、あるいはすくなくとも主

(9) D. Čyževskij, "Hallské rukopisy děl J. A. Komenského," *Archiv pro bádání o životě a spisach J[ana] A[mosa] K[omenského]*, 第15分冊, 85-107 [チジェフスキーはドイツ語圏では Tschizewskij として知られている].

(10) J. Patera, 前掲書, XXVI, XXX.

(11) コメニウスの戯曲「遊戯学校 (Škola hrou)」の前口上を参照せよ。

(12) J. Hendrich, "Komenský dramatik," *J[an] A[mos] K[omenský]*, 133.

[63] Saros Patak.

[64] Orbis sensualium pictus.

[65] De sermonis Latini studio.

[66] Wrocław, ドイツ名 Breslau.

[67] Diogenes Cynicus.

[68] Abraham Patriarcha.

[69] Řád církevní Jednoty Bratři Českých.

[70] Synopsis Historica Persecutionum Ecclesiae Bohemicae.

[71] Adam Hartmann.

たる編集者はコメニウスとみななければなるまい。コメニウスはともかくも 1664 年のファン・デン・ベルゲ^[72]宛の書簡のなかで 1632 年に脱稿した自分の著書として『迫害史』を挙げている。⁽¹³⁾

1641 年 8 月にコメニウスはイギリス議会の招待でレシュノを發ち、ロンドンに赴いた。イギリス旅行の目的は、なかんずくかの地に自分の構想に基く科学アカデミーを創立することであった。しかしかれのイギリス滞在は短期に終わった。コメニウスは折からイギリスに勃発した内乱のためにこの国を離れ、スエーデンに一時滞在したのち、エルブロンクに落ち着いた。エルブロンクには当時数多くのチェコの亡命者が居留していた。若干の名を挙げれば、ス・トゥルヌ伯爵,^[73]ゼ・ジェロティーナ,^[74]ス・ホディツ,^[75]その他である。エルブロンク——当時スエーデン領、第二次大戦後ポーランドに復帰——にコメニウスは 6 年間滞在した。この時期にわれわれはコメニウスを二度レシュノにおいて見る。一度は 1642 年 10 月である。滞在の目的は、自分の家族と蔵書を新しい住地に移すことであった。もう一度は、1644 年春である。このたびは、同胞教団の会合に出席するためであった。

当時のコメニウスの財産状態が如何なる様を呈していたかをもっともよく物語るものは、1644-45 年のエルブロンク市の出納簿のなかに筆者がみつけた短い覚え書である。それは、コメニウスが市を代表して 1644 年 8 月にオルラ^[76]の宗教会議に派遣されたこと、市参事会がかれののためにこの任務用の新調の衣服と若干のシャツを購入したことを報じている。⁽¹⁴⁾

エルブロンクにおけるコメニウスの主たる仕事は、スエーデンの学校のために新しい教科書を書いたり、古いものを書きなおしたりすることであった。これらの著作のなかでおそらくもっともよく知られているのは、『最新言語教授法』^[77]であろう。これは 1649 年にレシュノで刊行されている。

1649 年に、『大教授学』の著者は、興味深い論文『キリスト者信仰不一致廃止総論』^[78]を著した。そのなかでコメニウスは、カプチン修道僧ヴァレリアヌス・マグヌス^[79]がその著書『信仰戒律考』^[80]で表明した宗教的和解の理念に共鳴している。しかしコメニウスは、加えられた不正を人々が忘れるには時間を要するであろうと述べている。

[13] なかんずく F. M. Bartoś, “Kolem Komenského Historie persekucí,” *Archiv*, 第 14 分冊 (1938), 76-87.

[14] グダニスク県国立公文書館、エルブロンク市出納簿、第 3 巻、114 を参照せよ。この記入の写真復写を筆者は *Kalendarz “Zwrotu,” Český Těšín*, 1956, 118 に発表した。

[72] Peter van den Berge [原文ではポーランド風の表記 Piotr Montan が用いられている。これはラテン名 Petrus Montanus から来ている]。

[73] Jindřich Matička hrabě z Thurnu [原文ではポーランド風に Matyasz hrabia Thurn と表記されている] (1567-1640)。

[74] Ladislav Velen ze Zerotína [原文ではなかばポーランド風に Ładysław Velen z Żerotína と表記されている]。

[75] Zdeněk z Hodic.

[76] Orla.

[77] *Linguarum methodus novissima*.

[78] *De tollendis Christianorum in rebus fidei dissidiis deliberatio catholica*.

[79] Valerianus Magnus.

[80] *Judicium de regula credendi*.

この時期にはまた、これまでまったく知られることのなかったコメニウスの自伝が書かれている。これは筆者がトルニ^[81]の市立コペルニクス記念図書館のコレクションのなかにあるトルニの説教師シェーンヴァルト^[82]の家系譜のなかから見つけ出したものである。私はこの自伝をプラハの『アルヒヴム・コメンスケーホ』^[83]誌第 57 号に発表した。

1648 年にコメニウスはレシュノに戻り、そこでふたたびギムナジウム校長の職に就いた。

三十年戦争が終了してヴェストファーレン条約が結ばれたとき、チェコ問題は人々の念頭からすっかり去っていた。亡命者の帰国の望みは、ことごとく断たれた。同胞教団はかねてから望みを託していたオクセンシュティールナ^[84]に裏切られた。激怒に駆られたコメニウスは、1648 年 10 月、オクセンシュティールナに書簡^[15]を送った。教団員にとって悲劇的であったあの日々に、有名な『同胞教団のまさに死なんとする母親の遺言』^[85]が成立している。このなかで著者は、同胞教団の名において、チェコ民族に同胞教団員にとってもっとも尊いもの、すなわち真理と民族に対する愛、「愛すべき母国語」の保護と若者に対する配慮を教示した。この著作のなかにわれわれはまたコメニウスのつぎのような予言的なことばを読む：「神の怒りの嵐が過ぎ去ったのち、自分の問題を自分で処理する権利がふたたび諸君に戻されるであろう。おお、チェコ人たちよ。」^[86]

当時すでに名声の轟いていた教育者に、ポーランドの啓蒙的な大貴族オパリニスキ^[87]がシェラクフ^[88]にギムナジウムを設立するという意図をもってこの学校のための詳細な計画書を作成してくれるよう依頼してきたのは、コメニウスの第二次レシュノ滞在の時期であった。コメニウスはこのような計画書の作成ばかりではなく、この学校の必要に応じて教科書までも書き直し、また書き下したのである。これがすなわち 1651 年に出版された『シェラクフのオパリニスキ・ギムナジウムの教科書《ポーランド語によるラテン語購読入門》』^[89]であり、同じ年にレシュノで刊行された道徳学の最初の教科書のひとつである『オパリニスキ・ギムナジウム教科書《徳性論》』^[90]である。

1649 年にコメニウスはポーランドの史家ワツッキ^[91]の浩瀚な著作集『ボヘミア同胞教団の起源と功績』^[92]を刊行した。これは、とくに 16 世紀末の同胞教団の性格と歴史について

[15] J. Patera, 前掲書, CXVII.

[81] Toruń.

[82] Peter Schönwald [原文ではポーランド語風に Piotr Schönwald と表記されている].

[83] Archivum Komenského [原文ではなかばポーランド語風に Archivum Komeńskiego と表記されている].

[84] Axel Oxenstierna (1583–1654). 伯爵, スウェーデン王グスタフ・アドルフ二世のもっとも密接な協力者, 1612 年からその宰相, 1632 年から摂政。

[85] Kšaft umírající matky Jednoty bratrské.

[86] Po přejítí vichřic hněvu Božího, vláda věcí tvých k tobě se zase navrátí, o lide český.

[87] Krzysztof Opaliński (1609–55).

[88] Sieraków.

[89] Scholae Latinae vestibulum in usum Gymnasii Opaliniani Sirocoviensis clave Polonici sermonis reseratum.

[90] Character virtutum in usum Gymnasii Opaliniani.

[91] Jan Łasicki.

[92] De origine et rebus gestis Fratrum Bohemorum.

での興味深い寄与をなしている。

2年ばかりの第二次レシュノ滞在ののち、コメニウスはハンガリーに赴いた。それは、かの地においてラーコーチ大公^[93]のもとで重要な政治的役割を果し、合せて「汎知」的の学校を設立するためであった。

4年間をポーランドの外で過したのち、コメニウスは三たびレシュノに戻った。この度が最後のレシュノ滞在になった。コメニウスの第三次レシュノ滞在は第二次と同じく2年であった。コメニウスはポーランドを自分の第二の祖国と呼び、その国民に心からの愛着を感じていた。かれはポーランドの文学作品に対する認識を深め、ことにレイ^[94]とコハノフスキ^[95]を高く評価した。^[16]コメニウスはみずからポーランドの詩のチェコ語への翻訳に携わっている。すでにレシュノ滞在中に準備され、アムステルダムで出版された賛美歌集^[96]のなかに、コメニウスは一連のポーランドの歌謡の翻訳を挿入している。この賛美歌集にはコメニウスの翻訳でなかならず有名なコハノフスキの歌「主よ、汝は惜しげもなく恵み給うなれど、われらは何をもちて汝の好意に報ゆべきや」が載せられている。

ここでもうひとつ指摘しておきたいのは、1660年のポーランド語の聖書の刊行に際して、コメニウスが大いに尽力したことである。^[17]

コメニウスは、ボヘミア同胞教団をなによりもまずチェコ人の民族的再生に貢献すべき前衛とみなした。かれはポーランドにおいて、あたかも国家のなかの国家の如く周囲になじまない社会的宗教的組織体を創出することに貢献した。ポーランドが決定的にスウェーデン人に敵対し、このスウェーデン人と同胞教団員が連帯する——スウェーデンの勝利は、かれらにとって祖国復帰の条件をつくり出すかも知れなかった——とすれば、ポーランドの国家理性との衝突は必至であった。1655年7月25日のウィジチ^[97]におけるポーランド軍の屈服ののち、スウェーデン軍は大ポーランドの諸都市に進駐した。レシュノにもまたスウェーデン軍がやってきた。

このときレシュノにレシュチュイニスキ庄の管領シュリフティンク^[98]がクラクフから戻ってきた。シュリフティンクはクラクフでスウェーデン王カール・グスタフに忠誠を誓ってきたばかりであった。シュリフティンクは同胞教団の司教ゲルティフとコメニウスをレシュチュイニスキ城に召喚し、プロテスタントの名においてスウェーデン王に忠誠宣誓書を送るように説き勧めた。コメニウスはこれを断った。かれはシュリフティンクの強い要請でたんに頌詩を書くことにのみ応じた。数日後シュリフティンクはコメニウスをまたも城内によびつけ、ことば巧みにコメニウスを説いて『カール・グスタフ〔王〕に〔献ぐ〕』^[100]と

(16) アムステルダム賛美歌集へのコメニウスの序文を参照せよ。

(17) F. M. Bartoš, "Polská bible vydaná Komenským," *Český Bratr*, 26号 (1950), 81.

[93] Zsigmond Rákóczy. György Rákóczy II (1621–60)の子。

[94] Mikołaj Rej z Nagłowic (1505–69).

[95] Jan Kochanowski z Czarnolasu (1530–84).

[96] Kancionál.

[97] Ujśc.

[98] Jan Jerzy Szlichtyng [原文では Schlichting].

[99] Gertich [原文ではポーランド語風に Gertych となっている].

[100] Carolo Gustavo,

いう詩の原稿を提出させた。シュリフティンクは作者に、原稿は事前の承認をとりつけるためにボグスワフ・レシュチュイニスキに提出されるであろうと保証した。しかしボグスワフ・レシュチュイニスキは1652年にカトリックに改宗していた。シュリフティンクは約束を守らず、大急ぎで頌詩をヴロツワフで印刷させた。頌詩はこうしてその作者の意図にまったく反して宣伝の目的に利用されることになった。一回目のレシュチュイニスキ城召喚は、シュリフティンクのレシュノ帰還後まもなく、すなわち1655年秋の初めのことであったに違いない。コメニウスはつまりスエーデン王がポーランドの王位につくことが強く期待されたときに、『カール・グスタフに』を書いたのである。当時は同胞教団の庇護者ボグスワフ・レシュチュイニスキもまた、いやかれのみならずポーランドの領主の大多数がポーランド王ヤン・カジミェシュ^[101]の命運は尽きたと考えていた。したがって当時はコメニウスの頌詩は、ポーランド貴族の大多数の意見とそれほど鋭い対立をなしていなかったのである。われわれはこの際、著名なポーランドのカトリック詩人トファルドフスキ^[102]もまた、スエーデン王に敬意を表してコメニウスに先んじて歓迎の歌を發表していることを想起しておきたい。

コメニウスの頌詩の本来の部分は、むしろ短い。作者は、ただ序章においてのみ当時のこの種の文学作品のしきたりに従ってカール・グスタフの才幹とその軍隊の威力について書いている。作者がずっと大きく取上げているのは、まったく別の問題、すなわち王はいかにしてポーランド人を選べるべきかという問題である。コメニウスはこの頌詩のなかでとりわけ次のようなことを書いているのである：「かれらに以前よりも大きな、そしてよりよい自由を与え給え。すべてのことについてすべての人に自由をひろげ給え。万人が自由であることを知らしめ給え。大貴族^[103]にも小貴族^[104]にも、町人にも農村の人々にも、水呑み百姓さえにも、それぞれにふさわしい大きさの自由を与え給え。国民のうちのたんに少数の者ばかりではなく、いと高き者からいと卑しき者に至るまですべての者が自由たるべきなり。各人に各人の自由を与え給え。」^[18]

これらのことばから、また頌歌の他の部分から明らかなように、この場合にコメニウスの「反ポーランド性」のいかなる発現も問題となり得ない。筆者はむしろまったく逆であると言いたい。この偉大なチェコの愛国者は、宗教的狂信のかわりに良心の自由と寛容を要求し、ポーランド人のために人格的自由を要求することによって、ここにポーランドの真の友として立ち現われている。かれは実際そのとおりであったし、同時にまた反動的政府の断固たる敵対者でもあった。

しかしながら戦争は同胞教団員が予想していたのとは異なる経過をたどった。愛する祖国

[18] このことばは、グルディバツハ (Ł. Gurdybacha) 教授によっても、1956年のレシュノでのポーランド科学アカデミーの年次大会での「コメニウスのポーランドにおける活動」という報告のなかで引用されている。グルディバツハは *Działalność Jana Amosa Komenskigo w Polsce*, Warszawa 1957 というすぐれた本を著している。J. V. Klima, "Komenský und Polen," *Slavische Rundschau*, 1938, 第5分冊, 309-16 もここで挙ぐるに価する論文である。

[101] Jan Kazimierz (1609-72). ポーランド王 (1664-68).

[102] Samuel Twardowski ze Skrzypny (1595 / 1600 頃 - 1661 頃).

[103] magnaci.

[104] szlachta.

への帰還の最後の望みが潰えた。1655年4月29日にポーランド貴族連合軍^[105]がレシュノに侵入してきた。同日この都市は炎上した。コメニウスの家も焼け、家と一緒にかけがえのない貴重な手稿が灰燼に帰した。そのなかにはなかならず数十年にわたる仕事の成果たるチェコ語＝ラテン語辞典のための資料が含まれていた。またこのときかれの蔵書の一部も灰になった。コメニウスはこの火災を1656年にアムステルダムで刊行された『レシュノ滅亡記』^[106]のなかで描写している。

このようにしてコメニウスは、自分の第二の祖国を失ったのである。病める老人はしばらくのあいだドイツを放浪したのち、アムステルダムのデ・ヘール^[107]のところに身を寄せた。異国の地でコメニウスは1670年11月15日に生涯を閉じた。この偉大な学者であり愛国者であった人物の遺骸は、いまだにかれがかくも熱愛した祖国に移送されていない。

ボヘミア同胞教団の豊かな文書は、コメニウスの書簡とともに、第二次大戦末期レシュノが解放される直前にヒトラーの軍隊によって西方に運び去られ、行方知れずとなった。筆者はこの文書を1959年にドレスデンの近くのヘルンフート^[108]で発見し、翌年そのポーランドへの返還を実現した。そのなかにはなかならずその一章がポーランドに献じられているコメニウスの未刊の作品『エリヤの叫び』^[109] 筆者が『アクタ・コメニアーナ』^[110]誌に発表したコメニウスのこれまで知られなかった説教の手稿がある。

ポーランドにおいてコメニウスの業績は一般に最大の尊敬をもって受け容れられてきた。コメニウスの業績は過去において生きていたし、現に生きており、将来とも生き続けるだろう。

(19) A. Škarka, “Komenského výzva Evigilia, Polonia!” *Studia poświęcone stosunkom literackim polsko-czeskim i polsko-słowackim*, Wrocław 1969, 17–29.

[105] Konfederaci. 封建時代のポーランドでは貴族や都市が特定の目的を達成するために連合して立ちあがる伝統があった。この連合 (konfederacja) は目的が達成されると解散された。ここで言及されているのは、スウェーデンの侵入に対抗して成立したティショフツィ連合 Konfederacja tyszowiecka のことである。

[106] Excidium Lesnae.

[107] Laurentius de Geer [原文ではポーランド語風に Wawrzynic de Geer と表記されている]。

[108] Herrnhut.

[109] Clamores Eliae.

[110] Acta Comeniana.